



令和4年度 第2回いなべ在宅医療・介護連携研究会 を開催しました

第2回研究会では、ACPをテーマにご講演をいただき、多職種の専門職を交えた活発な意見交換ができました。

～実践例から学ぶ、現場で使える医療と介護の連携 Part II～

日時：令和5年2月9日（木）18:30～20:10

開催方法：Zoomによるオンライン研修

参加者：いなべ地域の医療・介護専門職 57名

1 講演

「エンディングノートを利用した『老いじたく』について」

紀宝町地域包括支援センター

主任介護支援専門員 南友也氏

2 グループワーク

「現場で感じるACPの現状や課題について」

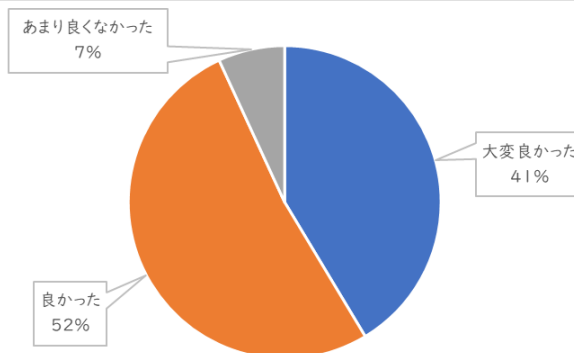
- ・講演内容を踏まえて感じたことや、現場で経験された看取りやACPの事例のこと。課題と感じていることなど、8グループに分かれて意見交換しました。

グループワーク意見（一部抜粋）

- ・DNAR（心肺蘇生を望まない意思表示）があっても、救急車を要請されるケースがあり、半数は自宅、半数は施設からの要請。話し合いをしている、いざとなれば救急車を呼んでしまう場合もある。救急は、明らかに亡くなっていない場合は搬送する。
- ・CMの業務の中でも訪問診療などや勉強会で通して関わりが少しずつ増えてきており、見取りが身近になってきている。実際の中ではなかなか踏み入って聞くことは難しい。
- ・活動は様々なところで起こっているが、お互いが知らないことが多い。大規模なことを立ちあげるのではなく、無理のない範囲の活動を長く継続できることが大切。
- ・スライドにもあったが、みどりいなを開催し、すべての職種にスポットライトをあてるということで、多職種が尊重し合える関係ができています。

アンケート結果 回収人数：36名

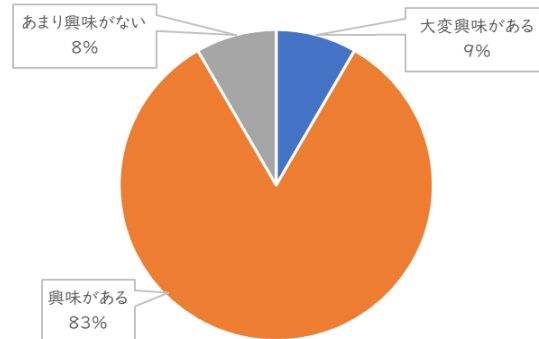
《研修会及びグループワークはいかかでしたか？》



（一部抜粋）

- ・消防としてACPへの関わり方や普及について考えるうえで、ヒントを得ることができた。グループワークではACPの中でも特にDNARに関する事について、消防の現状を少しだが共有していただく事ができたと思う。（消防職員）
- ・リハビリ専門職として、身体機能の改善や日常生活動作の改善だけを目指すのではなく、患者様、利用者様が「どう生ききる」という視点を持ってリハビリを実施する事も大切だと感じる事ができた。（リハビリ職）
- ・病気をなおす医療の場でのエンディングノートは進めにくい。（看護師）
- ・紀宝町及び紀南地域の『みどりいな』への参加率の高さが素晴らしいと感じた。難しく考えずに楽しく取り組むことは大事。グループワークでは、課題解決に向けた意見交換もでき、できることから取り組んでいきたいと思う。（介護福祉士・介護職）
- ・紀南地域でのACP普及啓発の取り組みについて知ることができて勉強になった。暗くなりがちな話題だが面白いことをやろうという心持ちで多職種や住民を巻き込んでいく取り組みにとっても良いと感じました。（薬剤師）

《『みどりいな』のような看取りに着目した取組に興味はありますか？》



（一部抜粋）

- ・事例検討だけでなく、内容が自由で楽しそう。興味があれば誰でも参加できそうな雰囲気で見取りをわかり、対応力も備えた人材育成に効果的だった。（社会福祉士）
- ・たくさんの人で楽しく無理せず続けられることがすごいと感じた。看取りに対してみんなで考えることは怖くない、不安も軽減される効果があると感じた。（介護支援専門員）

《全体を通してのご意見》

（一部抜粋）

- ・強化月間があって、広報誌のトップで取り扱うなどがあると、話題にしやすい。
- ・11/30が人生会議の日ということを広報やいなべIOなどで引き続きPRをつづける。
- ・エンディングノート又は紀宝町の簡易版エンディングノートの全世帯への配布。